

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第27号 2017年10月31日 発行

目次

*Fukuzawa on Women in Context : A Brief Comparison with John Stuart Mill and Iwamoto Yoshiharu (Ballhatchet, Helen) …………… 2・3	*平成29年度ワークショップ「福沢諭吉から未来を学ぶ」 および中津市アーカイブズ講座 …………… 8・9
*寄書日の丸考(2)(都倉武之) …………… 4・5	*新収資料紹介 …………… 10
*日韓近現代史をめぐるワークショップ2 …………… 6・7	*主な動き …………… 11
	*センター諸記録(2017年4月～2017年9月) …… 12



早慶野球戦の日本人形

KとWの帽子をかぶり、KEIOとWASEDAのユニフォームを身につけた5体の童形の人形。投手と捕手、そして打者がいて、次のバッターも待機中。野手は捕球の構えである。繊細な顔立ちだけでなく、帽子やユニフォームも精巧に再現され、両校の校名は印刷ではなく手書きである。一方で、投手と思われる人形はグローブをしておらず、早慶のユニフォームの色は、本来慶應が灰色であるが、早稲田の白色と反転しているなど、若干奇妙な点も目につく。

この一組の人形は、京都の丸平大木平蔵人形店の昭和初期のラベルが貼られた木箱に収められ、旧遠山元一(日興証券創立者)邸の開かずのタンスにしまい込まれていた。平成29(2017)年に発見され、遠山公一氏より慶應義塾に寄贈されることになった。人形の来歴の詳細は今のところ明らかでなく、今後調査予定である。

早慶野球戦は、明治36(1903)年に開始されたが、3年後に応援過熱で中止となり、以後19年間の空白を経て大正15(1926)年に復活、折しもラジオ放送の開始や神宮球場の完成なども相まって、国民的な関心事として大いに人気を集めた。宮武三郎、山下実、水原茂ら、スター選手を抱える慶應野球部が日系二世の腰本寿監督の元で六大学野球全勝優勝を飾ったのは昭和3(1928)年秋リーグ。その勝利を記念するストッキングの1本の白線も、この人形たちの3人の塾軍(慶應チームは当時こう呼ばれた)選手の足元にしっかりと引かれているから、それ以降の作品であることがわかる。

戦前の学生スポーツがいかに存在感ときらめきを放ったかを今日に伝える貴重な資料といえよう。(都倉)

Fukuzawa on Women in Context: A Brief Comparison with John Stuart Mill and Iwamoto Yoshiharu.

Ballhatchet, Helen

I learnt many things while working on the translations of Fukuzawa's writings on women and the family, and am really grateful for the opportunity to take part in the *Thought of Fukuzawa* series and the support of the Center, particularly the generous guidance of Professor Nishizawa. In the small space that I have here, I would like to contextualise Fukuzawa's views on women through a brief comparison with two other contemporary spokesmen for women, John Stuart Mill in Britain and Iwamoto Yoshiharu in Japan.

We know that Fukuzawa read, and was influenced by, *The Subjection of Women*. Both Mill and Fukuzawa considered that it was reasonable for married women to look after household affairs while their husbands acted as the wage earners – earning criticism from more recent feminists as a result. On the other hand, Fukuzawa did not share Mill's enthusiasm for female suffrage. Another contrast can be found in their attitudes to human sexuality. In *Unitarianism* Mill divided human pleasures into the higher and the lower, with the higher being those that involved the intellect. The pleasure that people derived from sexual activity was a manifestation of their "animal nature". In a letter to a follower, he further wrote that men were capable of controlling their sexual passions through reason. This notion challenged the common justification of prostitution in Britain at the time, the argument that it was a necessary evil that must be tolerated to avoid social chaos. It was therefore directly linked to his decision to join the feminist opposition to Britain's short-lived experiment with licensed prostitution that began in 1864 and ended in 1886 after much controversy.

Fukuzawa also thought that men were capable of controlling their sexual urges and agreed with Mill that prostitutes were not the cause of male promiscuity. But unlike Mill, Fukuzawa emphasized the importance of sexual fulfillment to the health and happiness of humans as well as animals, and women as well as men. While he agreed with Mill that the non-physical aspect of male-female relationships grew in importance as a culture developed, he was not prepared to accept that emotional interactions were more important than physical ones. He saw prostitution as necessary in the present stage of social evolution in the sense that without prostitutes respectable unmarried women and widows would succumb to the pleasures of sexual relationships with willing males.

Japanese Christians played an important role in the emancipation of women in Meiji Japan. Fukuzawa employed a female missionary to teach girls, including his daughters, for a short period, and for an even shorter period sent three of them to board at a mission school. Iwamoto Yoshiharu devoted his life to the female cause, editing *Jogaku zasshi* as well as running Meiji jogakko. Like Fukuzawa and Mill he viewed men and women as equal. He was clearly more committed to female education than Fukuzawa and supported a limited political role for them. Editorials in *Jogaku zasshi*, presumably written by Iwamoto, show that he was familiar with Fukuzawa's writings on women of the 1880s and 1890s. He joined Fukuzawa in condemning the Confucian view that respectable men and women should not associate with each other, and that even married couples should preserve a certain distance. He also agreed that prostitutes were less than human and criticised men who consorted with them, branding them moral criminals who reduced women to the level of animals and calling on them to stop seeing women as mere instruments of pleasure. However, he wanted the government to abolish prostitution and the licensing system, denying that it was an effective measure against the spread of sexually transmitted diseases.

While both men saw prostitutes as less than human, Iwamoto criticised them more strongly. Having accepted their fate as the instruments of men, they had lost their human rights, and there was no need for the government to be lenient with them. They encouraged men to abandon virtue and destroyed social customs. They were also the cause of syphilis. These were all reasons for abolition rather than Fukuzawa's more gradual approach. Another difference was that Iwamoto, like Mill, had a negative attitude to sexual activity. Physical relations alone could never be truly satisfying, and those who wanted physical satisfaction without any emotional ties were slaves of debauchery. While Fukuzawa looked forward to an age of free love, Iwamoto's ideal was a time when sexual activity would be seen as a duty that could not be avoided, something carried out only for the good of the nation and in order to produce descendants.

時代のなかの福沢女性論

— John Stuart Mill および巖本善治との比較から —

慶應義塾大学名誉教授 ポールハチェット, ヘレン

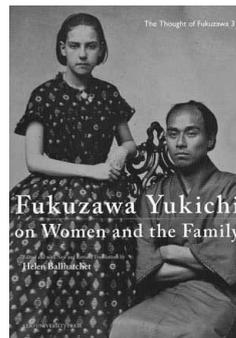
福沢の女性論と家族論の翻訳を進めながら、私は多くのことを学んだ。そして福沢研究センターの助成を得て *Thought of Fukuzawa* シリーズに参加する機会を得たことを大変喜ばしく思う。この小論では、同時代のもう2人のいわゆる男性フェミニスト—英国の John Stuart Mill (ジョン・スチュワート・ミル) と日本の巖本善治—との比較を通して福沢の女性に対する見解をより客観的に理解する方法を提案させていただきたい。

周知のように、福沢は『女性の隷従』から影響を受けている。ミルも福沢も、夫が賃金労働者として働いている間に、既婚女性が家事の面倒をみるのは当然のことであると考えていた。そのために、後世のフェミニストから批判を受けている。一方で福沢は、ミルの女性参政権への強い関心には共感していない。もうひとつ対照的であるのは、人間のセクシャリティに対する態度である。『功利主義』のなかで、ミルは人間の快樂を高尚なるものと低俗なるものに分けた。高尚なる快樂は、知性を元にするものであるのに対して、人間の性行為による快樂は、低俗なる「動物的な性質」(本能)の明示とされた。さらに信奉者への手紙の中で、男性は自らの性的欲望を、理性をもってコントロールすることができる筈だと主張し、売春が社会的無秩序をさけるための必要悪であるという、当時英国に主流だった弁明に異議を唱えた。その意見を元にフェミニストの立場から、1864年に導入され、1886年に廃止されるまで英国で大きな議論を巻き起こした公娼制度に対する反対運動に参加した。福沢もまた男性は自らの性的な衝動をコントロールすることができると考え、男性が乱交を引き起こすのは売春婦の所為ではないとするミルに賛成した。しかしミルと異なり、福沢は動物と同じ様に人間も、そして男性と同じように女性も、健康と幸福のために、性的充足が欠かせないと強調した。彼は男女関係の非肉体的な側面は、文化的発展において重要性を増すというミルの考えに賛成しながら、肉体的なものより感情的なふれあいの方がより重要であるということは受け入れられなかった。彼は当時の社会の発展段階では、売春婦がいなければ、きちんとした未婚の女性や夫を亡くした女性が、それを望んでいる男性との性的な関係の快樂に屈すると感じ、売春は必要であるとみなした。

日本のクリスチャンは、明治の日本において、女性の解放に重要な役割を果たした。福沢は彼の娘たちを含む少女たちを教えるために、短い期間女性宣教師を雇った。そしてもっと短い期間になるが、3人の娘をミッション

スクールに寄宿させた。巖本善治は明治女学校を運営しながら『女学雑誌』を編集し、女性運動に生涯を捧げた。福沢やミルと同じく、男性と女性は平等であるという見解に立った。彼は福沢よりは明確に女性の教育に尽力し、女性のある程度の政治的活躍を望んだ。巖本によって書かれているらしい『女学雑誌』の社説は、彼が1880年代1890年代の福沢の女性論をよく読んでいることを表わしている。彼は、れっきとした男女をお互いに交際させず、結婚した夫婦でさえ一定の距離を保たせる儒学者の見解を厳しく責める福沢に賛同した。また売春婦たちを人間以下であるとする見解も、福沢との共通点である。彼女たちと付き合う男性に、女性たちを動物のレベルに下げる道徳上の罪人の烙印を押し、女性をたかが快樂の道具に過ぎないとみなすことを止めるよう要求した。そして彼は、公娼制度が性的な伝染病の蔓延に対抗する有効な手段であることを否定して、売春—すなわち公娼制度—の廃止を訴えた。

2人とも売春婦を人間以下とみなすが、巖本は彼女たちをより強く批判した。男性の道具としての運命を受け入れてしまった彼女たちは、もはや人間としての権利を失っている。政府は彼女たちに寛大になる必要はない。彼女たちは男性に不徳を勧め、風俗を乱していた。彼女たちはまた梅毒の病原であった。それらはすべて廃止のための理由であり、福沢の方はより漸進的な働きかけであった。もうひとつの相違は、巖本はミル同様、性行為に対して消極的な態度であった。人間は肉体的関係のみではまったく満足することはできず、感情が伴わない肉体的な満足を求める人びとは、放蕩の奴隷であった。福沢がフリーラブの時代を望む一方、巖本の理想は性行為がもたらす子供を作る目的で実行するものであり、国家のため、イエのための、避けることができない義務となる時代であった。(訳: 西沢直子)



慶應義塾大学出版会 2017年3月 7000円+税

同書は、ヘレン・ポールハチェット氏の新訳による福沢論吉の女性論・家族論集である。冒頭に同氏による秀逸で充実した General Introduction があり、また福沢の家族論を考える上で重要な「ひびのをしへ」や息子たちへの手紙も収録されていることは、同書の特長のひとつである。

— 戦争プロジェクト調査余滴 —

寄書日の丸考(2)

都 倉 武 之

旗を観察する視座

現在、当センターで把握している旗の集合は、慶應関係者の所持していた日の丸全体の縮図ではない、ということには注意が必要である。ましてや、1枚だけ展示されている日の丸があったら、それは一般的な1枚ではなく個性を有する1枚であることは十分想起されねばならない。周囲には今は無き、多くの日の丸があった。実際筆者は、以下のような事例に接した。

・GHQの没収を避けるために軍刀と寄書日の丸を屋根裏に隠したら引っ越しの際に失念して紛失した。(神代忠男：昭和18年学徒出陣(以下「学出」と略記)・19年経済学部卒(以下「19経卒」のように略記))

・終戦時にいた基地を接収に来た米兵に、日本刀と日の丸を共に友好的にあげてしまった。(須藤忠保：学出・22経卒)

・戦死した兄肥田穎(学出・19年戦没)が自宅に残した旗は自分の棺に入れてもらう予定だったが慶應の取り組みを知り寄贈した。(村田久子)

また、そもそも日の丸を持っていなかったという証言も得た。小侯嘉男(学出・21経卒)は、「派手なことが嫌い」という理由で、寄書日の丸をもらわなかった。日の丸を肩から掛けずに入隊者の行進に加わったので警察官から見送りの学生が列を間違えたとか勘違いされ呼び止められ、「僕は征くんですよ」と応えたという。日の丸を付けていない入隊者は稀だったということであろう。

いつ書かれたか

上述のような注意の上で、慶應関係者の旗を丁寧に観察し、下記のように時期区分を設けてみたい。

① **日中戦争期** 最も早い時期の旗と確認できるのは八十島信之助のものである(画像1)。署名者の筆頭は医学部長で「武運長久／北島多一」と署名。以下15名の教授陣と、職員1名の署名があり、中央下に「拾六回生一同」とある。八十島は昭和13年3月医学部卒。同年4月より助手となったが、5月には陸軍短期現役軍医に志願し入営、同年中に満州に赴任したので、日の丸も昭和13年と推測される。医学部出身者は、卒業後も学校との関係が継続するので、大学関係者の寄書日の丸が存在したわけである。いうまでもなく文系学部を卒業後に応募した場合、日の丸を携えたとしても、彼らが署名をもらうのは、その当時の職場や家族であろう。彼らが召集によって中断されたのは、社会人としての地位と家族との関係であった。そして前稿で見たとおり、家族との関係は当初は千人針が繋ぐことが多かった。実際八十島の元には千人針も残されていた。

② **繰上卒業期** 学徒出陣以前で、軍隊への入隊者に学生の身分が強く意識されるのは、在学中に召集される場合(徴兵猶予の上限に達するか、徴兵猶予手続きをしなかった)、もしくは在学中に志願した場合(退学による入隊か、卒業後直ちに入隊)であろう。その中でも数があると思われるのは昭和18年9月繰上卒業の直前に陸海軍の空中勤務等に志願した場合であろう。陸軍の第1期特別操縦見習士官、海軍の第13期飛行専修予備学生・

第3期兵科予備学生への合格者等がそれである。彼らは学生生活と入隊が連続しており、文科系学生であっても学校関係の寄書日の丸を残すことがあった。

③ **学徒出陣期** 圧倒的に多いのは、昭和18年12月に入隊したいわゆる学徒出陣組である。彼らの身分は学生・生徒であったから、彼らが去るのは学校であった。慶應の場合三田の学生は大多数が、日吉も少なからぬ人数が入隊となり、当事者相互に揮毫し合うこととなったので、数は相当なものになったはずである。

④ **戦争末期** 昭和19年以降の入隊者のものである。前年の学徒出陣期ほど時期が集中していないが人数は多い。また前稿の通り、繊維不足から自粛機運が生じ、戦争終結に至る。

誰が、何を

全体を通して最も多い署名者は塾長小泉信三である。①②の時期には、一署名者として小泉の名が記されているものもあるが、主たる署名者の場合でも記載文言には揺れがあり、「忠烈無比 小泉信三」(横田俊：17.9政卒、剣道部蔵)、「送片山崇君上壯途／忠孝不二 小泉信三」(18.9政卒・13期飛行予備学生・20年戦没、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館蔵)、「贈八木田淳一郎君／忠孝不二 小泉信三」(18.9経卒：画像2)などの記載が確認できた。

これに対して③以降は主たる署名が塾長であることが極めて多く、その場合「征け〇〇〇〇君 小泉信三」と記すスタイルが確立、塾長を筆頭に教職員が署名する形式が大量に行われた。小泉信三は、日の丸への揮毫の様子について次のように記している。

秘書の川久保君は、塾長室の隣の会議室の細長い卓の上に、依頼の順に従って国旗を並べて置いて墨を磨る。私は卓に沿って自ら動きつゝ出陣者の氏名、私の自署、激励の文句の数字を片端から書いて片付けて行く。給仕の少年は硯を持つて、卓の向ふ側を私について歩く。その間に川久保君はまた新しい国旗を並べる。自動車の運転手栗山は、受付の代理を勤め、揮毫がすんで、糸を渡しているは順にそれを懸け吊るして置いた中から請求者の分をさがし出してやつたりする。斯ういふ事を幾日、幾時間繰り返したか。兎に角揮毫した国旗の数は千以上になつたであらう。(『海軍主計大尉小泉信吉』)

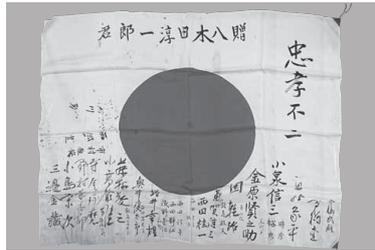
この点、東京帝国大学では、「『祈武運長久』の墨痕鮮やかな文字が印刷され」た旗が配布されたという報道がある(「出陣学徒へ総長の日章旗」、S18.11.12読売)。また、他大学の例を見ると「〇〇大学総長」と肩書きを付している署名が少なくない。しかし小泉が「慶應義塾長」という肩書きを書いた例は一つも見られず、教員においても「〇〇博士」や肩書きはない。また教員の中に職員が並列で多数混じっていることが多い。これらは慶應義塾の特徴と言えるかもしれない。ただし、配属将校らの軍人は、階級を記す傾向がある。「真鍋中佐」「松友中佐」「小侯大尉」のほか、入念なものは「慶應義塾大学服務陸軍大佐 木原義雄」とある。

文言に着目すると、この木原大佐は旗中央上部に大きく「任務ハ絶対也」と記すことがある(前稿画像2参照)。

全て当センター蔵



画像1 所蔵品中では最古と考えられる日の丸(八十島信之助宛)



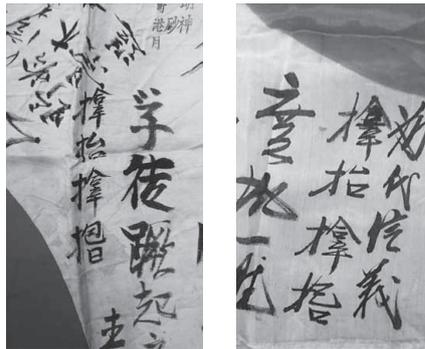
画像2 昭和18年9月繰り上げ卒業生の日の丸(八木田淳一郎宛)



画像3 学徒出陣期の教職員署名の例、上部に山崎又次郎揮毫(忽那静夫宛)



画像4 学徒出陣期の予科1年生の日の丸(肥田穎宛)



画像5 「サムハラ」の呪文が記された例(岡田延紹・左、田中多・右)

その一方で「頑張レ」と記すものも多くあり(前稿画像1「忠孝不二 小泉信三」の左)、かなり印象が異なる。木原は聞き取り調査でも頻出する配属将校である。「厳しかったけれども非常に好きだったのです。それで終戦後、木原大佐とその娘さん共々うちの会社に来て、勤めていただきました」(佐々田良二：18.9経卒)とか、「木原大佐ってのはね、なかなか人間味のある方でね。…昭和21年の復活早慶戦があって、そのときに木原大佐が来られたの。平服でね。戦争に負けたけど、慶應にこれだけ元気があるからいいよって」(前稿の肥田野淳)というように学生は概して戦後まで好印象を抱いたらしい。両極端の揮毫は、その行間をどのように読み解くべきか。

最も目立つ堂々たる署名として繰り返し登場するのが「生死一如帰大義 山崎又次郎」というものである(忽那静夫：学出・20年戦没：画像3)。政治学科の憲法学者山崎に関する回想もしばしば聞かれる。「戦争賛美の話をしてた」教授で、軍から戻って復学後何を話すか講義を聞きに行くと「自分が戦争中からいかに民主主義を尊重していたか」を語りだし「反省の弁かなにかを期待して、静まりかえていた教室のあちこちから失笑がもれてきた」という回想がある(土井庄一郎・22経卒「若い日の私」、S62.12.17毎日)。記事には名前がないが、筆者は土井からこの教授が山崎であると聞いた。抑制的な筆致に徹している『慶應義塾百年史』にも山崎は「義塾の一般的学風とはちがった行き方をした」「イギリス的自由主義の傾向をもつ政治学科の学風とはすこしちがっていた」と評されている。揮毫における突出もその「ちがった行き方」といえようか。

ほかに教員が署名に添えた特徴ある言葉を、目につく範囲で列举してみよう。「殉国致死 今泉孝太郎」「神武伏敵 武運長久 及川恒忠」「堅正不却 佐原六郎」「神霊在上 聖戦必勝 高橋龍雄」「今日は学び明日はいで たつ若人の言挙はせじますらをなれば 富田正文」「挙り立ち今ぞいでたつ若人のますらをぶりのゆゝしくも

あるか 富田正文」「古道照顔色 永田清」「兵学一如原実」「義勇奉公 林毅陸」

なお、③以降でも教職員ではなく、級友や知友、家族が中心と思われるものも多い。それらは学年別に見ると日吉の予科生に多い。前述の肥田(18年4月予科入学：画像4)は、「お兄さんがんばって」や、「やっつける」「突込め」「米鬼英鬼」「征け醜の御楯」「真の日本精神に生きる」といった勇ましい文言が多く見られる。また部活等で別に寄せ書きする例も見られる。

これ以外に、前稿で記したように千人針が担っていた願掛けの要素を受け継ぐ場合がある。寺社の朱印等が捺されている場合があり、「湊川神社」(松尾俊治：19年入隊・23経卒)、「白浜明神 弾除砂 沼津市八幡町 港月」(岡田延紹：学出・19経卒)、「御所八幡宮」(田中新三郎：学出・19年政卒)、「奉修祈願武運長久 香里成田山」(上原良司：学出、20年戦没)等の例が確認された。身体守護の呪文とされる「サムハラ」の文字が記されているものもある(前出岡田、田中多：学出・23経卒：画像5)。

おわりに

国を象徴する国旗に名前を記しそれを携えるという行為は、呪術的色彩を帯びた千人針の系譜を継ぎながら、社会的に許容される壮行の儀礼的行為となった。筆者の関心は、裁量の極限まで限定された表現行為とはいえ、その肅々たる儀式中の裁量を、各署名者がどのように行使したか、ということである。富田正文は「言挙げはせじますらをなれば」と「言挙げ」している。何も言わない、これが暗黙の了解であったことの、何よりの証左である。なお、聞き取りと対照させることによって、一見没個性の日の丸たちの個性が照らし出され、断片的ではあるが、多様な視点からの分析可能性も垣間見えた。そのような意味において、やはり戦時資料は広汎に収集保管、そして公開されるべきものと考えらる。戦時下の日本人の一般的な心理と行動は、一層丁寧に考察されるべき課題である。

梨花史学研究所・梨花女子大学史学科・福沢研究センター共催 日韓近現代史をめぐるワークショップ 2

2014年に部局間協定を締結した韓国梨花女子大学梨花史学研究所との共催で、6月27日及び28日にワークショップを開催した。前年に続き2回目となる。

27日は午前10時より、梨花女子大学大学院の学生8名及び教員、福沢研究センター調査員5名及び教職員4名で、竹橋にある国立公文書館本館を見学した。まずは会議室において、国立公文書館の紹介ビデオを視聴し、日本における公文書館等の管理に関する法律の制定や国立公文書館の設立に関する説明を聞いた。その後2班に分かれて、文書館の職員の方の説明を聞きながら、収蔵資料の管理の様子やリーフキャストの器機など文書修復の様子、閲覧室等館内を見学した。見学プログラム終了後は、各自自由に1階の企画展示「翔べ日本の翼—航空発達史—」を観覧した。



午後は三田へ戻り昼食後、午後2時から慶應義塾図書館貴重書室の見学を行った。スペシャルコレクション担当の倉持隆氏の解説により、1850年の芝三田二本榎高輪辺絵図、1625年の朝鮮国礼曹参議書契文書、江戸後期の唐蘭船持渡鳥獸之図、770年の法隆寺百萬塔陀羅尼等を観覧した。見学後斯道文庫に移動し、午後3時からは斯道文庫主事堀川貴司氏の解説による所蔵資料の閲覧および文庫内見学を行った。まずは同文庫が所蔵している中国古典籍や朝鮮関係の書籍を閲覧し、その後文庫内を見学して、戦前の精神文化研究所所蔵品等の配架状況を見た。午後4時から再び場所を移動し、福沢研究センター西沢直子の説明で三田演説館を見学した。見学終了後、午後6時から南館5階ディスカッションルームにおいて、懇親会を行った。梨花女子大学の大学院生、慶應義塾大学の大学院生、福沢研究センターの教職員及び



調査員等が参加し、交流を深めた。

翌28日には、午後1時から5時半すぎまで、南館5階ディスカッションルームにおいて、日韓近現代史をめぐる研究報告会を行った。慶應義塾大学から1名、梨花女子大学から2名の計3名が発表し、それぞれの報告に1名ずつの討論者がコメント、その後全体討論を行った。司会は西沢が担当し、1テーマ当たり約75分間の報告および質疑応答がなされた。発表は各々の母国語で行い(姜兌琬氏は日本語で報告)、通訳は具知會氏(福沢研究センター)、梁熙晶氏(梨花女子大学)が行った。各報告の内容は、以下の通り。

姜兌琬氏(慶應義塾大学)の報告「福沢諭吉の人種観—S.A. ミッチェル問題」は、初期福沢諭吉の人間観が人間観に近いことに着目した、『学問のすゝめ』以前の時期における福沢の人間観についての考察であった。初期福沢が読んだ西洋書物の中で、彼が深く影響を受けた書物の一つがアメリカの地理学者ミッチェル(Samuel Augustus Mitchell)であった。福沢はミッチェルの地理書「School Geography」を多くの著作に引用し、特に『掌中万国一覽』には「School Geography」の一部を全訳して載せている。福沢が引用したミッチェルの人間観は地理的観点から人間を人種別に分け、それぞれの人種に優劣をつけたものであった。一方で福沢は、「School Geography」には半開の国の例として挙げられている「日本」を、翻訳の際に削除する。これはミッチェルを引用した部分の全てに行われ、さらには福沢の初期地理書全体に行われた。このような意識的削除を行ったのは、福沢が国の位置づけに敏感であったこと、また神を基準にした不変な秩序のもとで、半開な日本の評価が不変なものに定着されることを恐れたことが可能性として挙げられることを指摘した。



(文責：姜兌琬)

姜氏の報告に対して、コメンテーターの李知炫氏(梨花女子大学)より、「人間観」と「人種観」は同値概念か、なぜ初期の著作で分析したのか、以降の福沢の思想的変化との関連、日本人に対する事項を削除したことの影響の4点に関する質問があった。姜氏より「人間観」の中の一部として「人種観」を位置づけている、初期の著作は他の要因が少なく意図がはっきりすると思われる、福

沢は当初より十分に理解して翻訳していると考えられ、その後の自然な思想形成に繋がっていく、また日本を意識することで、世界の中で日本がどのように位置づけられるべきかという発想を生んだと考える、という回答があった。

朴映善氏(梨花女子大学)の報告「軍需品の日常用品への転換—日露戦争期における缶詰産業を中心に」は、缶詰が持っていた軍需品としての優れた効用と日露戦争の拡張性に着目して、日露戦争以後の軍需品の日用品への転換を考察した。缶詰が本格的に供給されるようになったのは、日清戦争以降である。そして日露戦争期には、日清戦争に比べて大量の缶詰が製造供給されており、技術改良により、産業として発展したことが知れる。また、戦地に派遣された兵士たちは、缶詰を必需食品、日用品と認識したため、缶詰の摂取は習慣化し、日常生活に戻った後も継続して缶詰を食した。軍需品として出発した缶詰は、日露戦争を契機に日用品に転換され、一般的な消費対象に変化したといえる。缶詰が日常生活に定着したことは、第一に新しい市場の開拓がなされていることや、第二に消費者層の拡大が見られることから伺える。今後こうした日露戦争を契機とする変換が特殊なものではなく、普遍的な現象だったことを明らかにするためには、缶詰以外の食品、被服類などを対象に分析する作業が必要になると述べた。

朴氏に対しては、三科仁伸氏(慶應義塾大学)より課題として、日露戦争期に限定されない通時的な検証が不可欠であることと、統計資料による数値を示す必要性が指摘され、戦争における缶詰利用の実態と缶詰産業の展開を別々に論じた上で統合することや、軍需品から日用品への転換を論証するための積極的な公文書等の利用が提案された。そして『日本帝国統計年鑑』のデータからは1910年代に缶詰産業が「日常用品」として定着していたことを立証することはむずかしく、また日露戦争後の海外輸出も在外邦人向けのみでは説明できないと思われるという見解も述べられた。朴氏は海軍の缶詰利用が陸軍に先行していること、戦時に安定的な供給をはかるため、戦間期に糧秣廠が設置されたこと、民間の技術開発によって缶詰の製造技術が進歩したことが指摘できることなどを回答した。



咸藝在氏(梨花女子大学)の報告「戦時期におけるスポーツ統制政策とスポーツ界の対応—野球の問題を中心に」は、戦時下国民の身体が国家管理の下に置かれ、体

育・スポーツに対する国家からの統制が強化される中で、野球界がどのように対応したのかを取り上げた。野球への批判は1910年代から続けられたが、特に戦時期は敵国アメリカの競技であることが問題であった。野球界では単に批判に反駁するだけでなく、野球が存続しなくてはならない理由を作り上げた。「魂の野球」といった概念で日本化された純日本野球の性格を強調し、また健全娯楽としての野球を主張した。専門誌『野球界』が1943年に『野球と相撲』へ転換したのも、野球界の対応のひとつの象徴であろう。しかしそれらは、正当性や現実性の側面では説得力に欠ける論理であった。時局便乗を批判し否定もしたが、野球を擁護する論理は当時の社会像を反映するしかなかったといえる。戦時体制の下で、野球競技が維持できたのは、野球界の積極的な対応だけではなく、長い間野球興行を支えてきた大衆的な支持があったからであろうと推測した。

咸氏の報告には、横山寛氏(慶應義塾大学)からコメントがあった。まず野球界の主張を政治・行政がどう受け止めたのか、あるいは野球界が政治・行政に具体的にどのように働きかけたのかを明らかにすることにより、野球存続への主体的な役割がはっきりすること、そして分析対象とした雑誌『野球界』の主張は野球界の主張といえるのか、野球の娯楽性と武士道の野球の間に存在する矛盾は、当時も複数の見解があったことを示しており、特定の個人や団体に即して考える必要があるのではないか、最後に咸氏が結論で述べた「大衆的な支持」については、別途論じないと論旨がぼやけてしまうのではないかという指摘があった。これらに対し咸氏は、今回の報告は行政側の対応には言及しなかったが、先行研究ではユニフォームの数字の変更や連盟の解散など、野球界は政府に指摘される前に先行して対応策を取ったことが報告されている、また健全な娯楽と武士道の野球は、職業野球と学生野球との差異で、前者は日常生活に関わるものと考えている、『野球界』の読者も対応に対しては賛否両論であり、社会に対する役割も100%では論じられない、大衆的な支持については、今後の課題としたい旨を回答した。



その後フロアとの質疑応答があり、研究報告会は終了した。報告者、討論者をはじめ、これからの両国の歴史研究を担う参加された若い方々の今後の研究に、寄与するところがあればうれしく思う。

(文責：西沢直子)

平成29年度 福沢研究センターワークショップ「福沢諭吉から未来を学ぶ」 および 中津市アーカイブズ講座

高校生から大学院生までが参加する福沢研究センター夏休みワークショップは、今年で6回目を迎えた。本年度は8月8日から10日までの2泊3日の日程で、「福沢諭吉から未来を学ぶ—『福翁自伝』からのメッセージ—」と題し、例年同様大阪・中津を巡った。

初日は大阪の福沢諭吉に関する史跡を探訪し、夜の読書会では、『福翁自伝』をテキストとして、彼が自身の生涯を通して未来へと伝えようとしたメッセージについて、2つのグループに分かれて話し合いを行った。本年度は初の試みとして大阪に宿泊したが、大阪での見学時間を充分にとることができ、『福翁自伝』で大きな部分を占める大阪での生活を、より追体験することができた。

2日目は中津へと移動し、中津市主催のアーカイブズ講座初級の部に参加した。ここからは中津南高校の生徒も合流して、中津市立小幡記念図書館において開講式を行い、元京都造形芸術大学の教授で文化財保存修復の専門家である尾立和則先生の講義を聴いた後、古民家を改装したまちなみ交流館で、古文書の解読に関する講義や実習を行った。本年度は例年の見学先に加えて、城下町の面影を残す金谷地区で散策や「おかこい山」の見学も行った。

3日目は、福沢記念館などを見学後、尾立先生指導のもと、襖の下張り文書の剥がし方や整理に関する講義と実習を行った。また、平成27年に日本遺産に登録された耶馬溪競秀峰や羅漢寺など、福沢に関わる史跡も見学した。



参加者は、高校生2名(志木高1、ニューヨーク学院1)、学部生5名(薬学部3、環境情報学部2)、大学院生5名であり、引率は大塚彰(志木高)、具知會(福沢研究センター)、都倉武之(同前)、西沢直子(同前)、馬場国博(SFC)、横山寛(福沢研究センター)の6名であった。

<「福沢諭吉から未来を学ぶ」詳細>

8月8日 8:00 東京駅発 のぞみ207号
10:33 新大阪駅着

【福沢諭吉関係史跡の見学①】

慶應大阪シティキャンパス・福沢諭吉誕生地記念碑・くすりの道修町資料館・除痘館記念展示室・大阪慶應義塾跡・大阪企業家ミュージアム

19:30～21:30 『福翁自伝』読書会

8月9日 8:42 新大阪駅発 のぞみ3号
10:53 小倉駅着
11:09 小倉駅発 ソニック15号
11:41 中津駅着

14:00～15:00 中津市立小幡記念図書館
古文書講座

15:10～16:30 まちなみ交流館 古文書講座

【福沢諭吉関係史跡の見学②】村上医家史料館

20:30～21:30 『福翁自伝』読書会

8月10日

【福沢諭吉関係史跡の見学③】

福沢記念館・増田宋太郎生家跡・中津城・中津市学校の門

10:00～12:15 中津市立小幡記念図書館
古文書講座×2回

【福沢諭吉関係史跡の見学④】青の洞門・競秀峰・羅漢寺

16:35 北九州空港発 スターフライヤー86便
羽田空港到着後解散

続いて、8月9日から13日まで4泊5日の日程で、中級の部が行われた。本年度は慶應義塾大学から1名、別府大学から7名、久留米大学から3名の大学生・大学院生の他、中津市民の方々も参加し、福沢諭吉の姉、礼が嫁いだ小田部家の襖の下張り文書の目録作成を行った。また、下張り文書はがしや史料撮影の実習、学生親睦会なども行い、参加者同士の交流を深めながら作業が進められた。福沢研究センターからTAとして松岡李奈と横山寛が参加した。中級者向けのアーカイブズ講座は9年目となった。

<中津市アーカイブズ講座 中級者の部 詳細>

8月9日 13:30 開講式 中津小幡記念図書館
中津市長・別府大学アーカイブズセンター長挨拶・参加教員紹介
14:00 講義①「襖下張り文書の解体と保存」
尾立和則先生(元京都造形芸術大学)
15:10 講義②「文書整理と目録編成」
針谷武志先生(別府大学)
16:05 講義③「史料撮影の基礎知識」
洗裕理先生(別府大学)

8月10日 9:00 講義④「福沢を巡る“資料”—歴史研究と資料について考える—」

		都倉武之
	10:45	福沢旧邸・福沢記念館見学
	13:30	整理・目録作成実習
8月11日	9:00	整理・目録作成実習
	18:30	学生親睦会
8月12日	9:00	整理・目録作成実習
	19:00	実習中間発表
8月13日	9:00	整理・目録作成実習
	10:45	実習成果発表
	12:15	閉講式 中津市教育委員会教育長挨拶

■ 参加記

A グループ (種谷望、井上正和、森田美帆、田村重人、齊藤礼子、松岡李奈)

今年度のワークショップは1日目の大阪での滞在時間が例年に比べて長く、葉の会社が軒を連ねる土修町(どしょうまち)や、大阪で活躍した先輩達も紹介されている企業家ミュージアムに初めて足を運び、「福沢以外の大阪を感じた」「福沢がいた2年半位の期間で大きな影響を受けたと感じた」という声が聞かれた。

大阪は福沢にとってどのような影響を与えたのか?という問いについて、大阪と東京の違いから話し合い、大阪の人は説明が丁寧で情に熱く地元愛がある、サービス精神や心遣いにたけているので、緒方先生は種痘事業やコレラの大流行時に予防策を親切に伝えていたのではないかと、という意見が出た。また、大阪は自立と商売の町で、お金を社会のために遣う合理的な考え方に加えて、福沢自身のお金への特殊な感覚(借金は嫌など)が、塾の授業料システムや時事新報での広告による料金徴収などを導き出したのではないかと意見も出た。大阪適塾での経験が、福沢の目指した日本全体のレベルアップに繋げる精神の礎になったのかもしれない。(文責:齊藤礼子)

2日目の輪読はその日に回ったところの復習をはじめ、ディスカッションも行われた。主なテーマは「福沢論吉が江戸生まれだったら」というものであった。福沢論吉は大阪生まれで長崎に移り、そこから江戸に上京していくが、もし江戸だったら彼はどのような人物になったのだろうか、地方で育ったことが彼の人格形成に何の影響を与えたのかということ話し合った。先生方、院生、学部生、高校生を含む6人で輪読を行ったが、ちょうど地方出身者と神奈川、もしくは東京出身がいたので議論が盛り上がった。私自身出身が関西にあたり、地方出身者として地元に対する愛着や、都会に対するあこがれを再度思い出すきっかけにもなった。どちらが良い悪いということはないが、少なくとも福沢論吉の人生において

は多大な影響を与えたのではないかという結論になり、彼自身の半生についてより興味を持ち、さらに私自身勉強したいと思った。

(文責:田村重人)



B グループ (沢村理企、福井一玄、柴崎愛美、石田優理亜、塩田藍、姜兌琬)

まず1日目の大阪をめぐる感想は「適塾は福沢諭吉が実際に学んでいたところで、その場に行くことができ感銘を受けた」「福翁自伝の話にでてくる実際の場所が確認できた」等、本で読んだ場所を直接経験できたことについて挙がった。適塾やくすりの道修町資料館、大阪慶應義塾跡等関連する場所を直接移動することでその距離感を知り、福沢の行動半径等を体感できた。そのほかにも「葉の発祥は富山のイメージだったが、大阪発祥のものもあることを知った」「福沢は学問以外に企業など範囲が広い」「慶應に医学部がある理由がわかった気がした」といった、史跡巡りを通して初めて分かることが議論の中心となった。

2日目の中津を周った感想については、「当時の福沢を感じるには大阪より良い場所。大阪と違って昔の痕跡が保存されている」「大阪に比べて広いところのため、人との距離が遠い」「中津城から福沢の家までの距離から、福沢の身分が分かった」等が挙がった。

実感を述べたうえでの自由討論では、福沢の新たな面、本を読んで疑問に思ったことの解決、史跡巡りを通して新たに生まれた疑問等について討論した。「福沢は勉強だけをする人のイメージだったが、既成概念にとらわれない人という新たな面を知った」「福沢の経済的な側面は、学生時代に商売の町にいたことで培われたのではないかと」「適塾での教え方である「人に合わせて伝える方法を変える」が自分の研究にも通じる」といった意見が挙げられた。また『福翁自伝』については「福沢の生きていた時代は情報の価値が違ったので、本は重要な情報源だった。情報の信頼性は人との信頼性であり、そういう意味では福沢の適塾仲間への信頼がみえる」「日清戦争に勝ち、日本は浮かれていた。曲がり角の時代に書かれた本」「中津を嫌っているが、中津出身の友達と交流を深めていることから、福沢の複雑な感情が見て取れる」「大阪時代のエピソードが重点的に書かれているのは、適塾で得た経験を後世に伝える目的があるためなのか」といった意見があった。(文責:姜兌琬、塩田藍)

❖ 新収資料紹介

2017年8月は、3つの貴重な資料群の受け入れがあった。福沢諭吉の二女房（ふさ）と結婚した桃介の実家岩崎家に所蔵されていた資料のご寄託と、やはり福沢桃介およびご子孫に関する資料のご寄贈、また森永製菓株式会社史料室から移管された資料群である。いずれも、今後近代日本研究の様々な分野において、重要な役割を果たす資料と考えられる。現在慶應義塾図書館旧館耐震工事のため、三田キャンパスに確保できる収蔵スペースが狭く、また作業スペースが離れているため整理作業が天候に左右されるなど、整理に時間が掛る状況にある。資料の公開については、耐震工事終了後に長年の課題である閲覧スペースが与えられれば、少しずつであっても進めることができると考える。

■ 川越岩崎家資料

【川越市奈良様寄託】

福沢研究センターのスタッフが最初に岩崎家に伺ったのは、平成11(1999)年のことであったようで、目的は当時編集が開始されていた『福沢諭吉書簡集』(岩波書店、2001～2003年)校訂作業のため、収録する岩崎紀一および育太郎に宛てた福沢諭吉の書簡を拝見するためであった。ご当主の岩崎家五代目昭九郎氏のご説明で、他にも多くの資料をご所蔵であることが判明し、翌12(2000)年7月9日に、当時の坂井達朗所長、松崎欣一副所長、小室正紀経済学部教授、西沢直子でお伺いして資料を写真複写させていただいた。福沢諭吉の書簡8通をはじめとして、福沢錦、福沢房、福沢桃介の書簡や、桃介の長男駒吉の結婚式に福沢一太郎以下親戚が集まった写真、桃介の賛が書かれた絵画の書幅など多くの貴重な資料を拝見した。

昭九郎氏は、お名前の通り昭和九年のお生まれで、現代日本のグラフィックデザインの礎を築いたといわれ、多摩美術大学の創設に参加した杉浦非水が名付親だそうである。杉浦の妻のアララギ派の歌人翠子は、桃介の妹にあたる。お仕事をご退職なさってからは岩崎家の歴史の顕彰に尽力され、膨大な資料を整理されていた。平成23年11月12日に福沢諭吉協会のメンバーが訪れた時も、ご丁寧な解説をいただき、福沢諭吉の妻錦の帯地で表装された房の日本画なども拝見する機会を得た。誠に残念ながら平成27年4月15日に永眠され、整理なさっていた資料群を今回福沢研究センターにご寄託いただくことになった。

福沢桃介の書簡からは慶應義塾の塾生の生活の一端もわかり、また地方名望家として岩崎家が果たした役割も明らかになる資料群である。



川越岩崎家資料



福沢桃介関係資料



■ 福沢桃介関係資料

【個人寄贈】

奇しくも今夏は、福沢桃介に関わる他の資料群の寄贈もあった。福沢桃介宛福沢諭吉差出の書簡13通を含み、そのうち明治21年7月18日付および同年8月17日付の2通は、前掲『福沢諭吉書簡集』では未校訂であったものである。他に書簡資料では、福沢房差出や桃介宛実家の父差出のものなどが含まれている。また桃介房夫妻の長男駒吉には子どもがなく、縁戚から養子をとったので、幅広く福沢家関係者の写真も残されていた。寄贈図書中には、一太郎が所蔵していたエンサイクロペディアも含まれている。他に着物類や筆筒2棹、長持、着物類、人形など物資料の寄贈も受けた。

■ 森永製菓株式会社鶴見工場旧蔵資料

【森永製菓株式会社寄贈】

金沢にあった青木製菓研究館から森永製菓株式会社が引き継いだ資料を中心としたもの。『菓友』や『製菓と図案誌』『菓舗の友』等、業界誌がかなり含まれるコレクションである。『山梨製菓食料新聞』など地方のものもあり、珍しい貴重なコレクションといえよう。

■ 福沢桃介宛書簡 1巻

【購入】

桃介宛の書簡が15通貼り込まれ、卷子になっている。犬養毅からの岐阜県よりの出馬に関する相談など、差出人は小泉信三2通、金谷範三、犬養毅2通、佐藤安ノ助、小橋一太2通、大口喜六、寺田甚与、高田早苗、伊東巳代治、尾崎行雄、小泉策太郎、榊原浩逸で、ほぼ昭和初期から11年ごろのものと思われる。

主な動き

■ センター公開講座

日吉キャンパスで開講している設置講座「近代日本と福沢諭吉 I」において、今年度も3名のゲストスピーカーをお招きして公開講座を開催した。講師と演題は以下のとおり。

名誉教授小室正紀：「福沢諭吉・『時事新報』の経済観—明治10年代を中心に—」（6月26日）

大妻女子大学名誉教授高木不二氏：「江戸時代の医薬事情」（7月3日）

韓国放送通信大学統合人文学研究所学術研究教授宋惠敏氏：「100余年前の韓国と福沢諭吉」（7月10日）

■ 新収資料展

例年1月10日の福沢先生誕生記念会に合わせて行ってきた新収資料展が今年度も図書館旧館改修工事により実施できなかった。このため、昨年同様、図書館新館1階展示室において、7月3日～8月5日にかけて「歴史資料を通して見る慶應義塾の人と教育」というテーマで関連資料を展示した。7月26日、8月4日には都倉准教授がギャラリートークを行った。

■ 新規受入資料の燻蒸

この夏はまとまりのある資料寄贈が相次いだ。8月4日および8月8日には福沢桃介関係資料を、8月22日には森永鶴見工場から製菓業界誌を引き取った。

■ 国際交流

センターは2014年7月に韓国梨花女子大学校梨花史学研究所と部局間の相互協力協定を締結、これまで活発な交流を行ってきた。このほど、韓国啓明大学校国際学研究所とも相互協力の話が持ち上がり、学内手続きを経て、8月末に井奥所長、平野副所長、池田経済学部教授(所員)が現地を訪問、29日に協定を締結した。



■ ワークショップの開催

昨年より少し早い日程で6月27日～7月5日まで、韓国梨花女子大学校から7名の短期研修生を受け入れた。

6月27日、専任所員の西沢教授、都倉准教授による引率のもと、研修生一行は国立公文書館を見学した。その後、三田キャンパスにもどり、図書館貴重書室、斯道文庫、演説館を見学した。

翌28日、センターと合同で日韓近現代史をめぐるワー

クシヨップ vol.2を開催、梨花女子大学から3名の研究報告があった。詳細は p.6～7。

■ 慶應大阪シティキャンパス (KOCC) におけるセンター講座

今年度は「関西の福沢山脈—財界で活躍した慶應義塾出身者—」をテーマに、以下の5名が講義を担当することになった。

10月28日 文学部教授・センター所長井奥成彦：
「岩下清周一小林一三を支えた男—」

11月18日 商学部教授・センター副所長平野隆：
「小林一三—大衆消費社会の創造者—」

12月23日 名誉教授小室正紀：
「掘り起こしてみたい関西企業家たち—岩おこし中興の人 小林林之助など—」

1月13日 大阪大学名誉教授宮本又郎氏：「外山脩造と山邊丈夫—士魂洋才、大阪に文明開化をもたらす—」

2月3日 文学部非常勤講師三科仁伸：「門野幾之進—社中を薫陶育成す—」

■ 所員の活動

センター専任所員による講演・講義は諸記録にありであるが、以下にあげるような行事にも所員の協力を得た。

看護医療学部教授山内慶太、理工学部新任教員ガイダンスで講演：「慶應義塾の原点」（4月6日）

経済学部准教授宮内環、システムデザイン・マネジメント研究科で講義：「On the *An Outline of a Theory of Civilization* by Fukuzawa Yukichi」（9月22日）

■ 展覧会への協力

7月11日、中津の福沢旧邸保存会から吉田事務局長が来訪、企画展に出品する資料を貸出した。

7月26日、港区平和展に出品する資料を貸出した。

11月28日～12月13日に開催される体育会創立125年記念特別展「近代日本と慶應スポーツ—体育の目的を忘るゝ勿れ—」のため、山内所員((看)教授)、都倉准教授が中心となって準備作業を行っている。

2018年夏に三田キャンパスで当センターと円覚寺の共催で開催予定の釈宗演展に向けて、円覚寺関係者等と打ち合わせを行った(4月13日、7月19日)。

11月17日から始まるイサム・ノグチ展に出品する資料を貸出するにあたり、東京オペラシティアートギャラリー福土理氏の来訪があった(6月9日)。

2018年秋に大分県で開催される第33回国民文化祭関連事業への協力依頼があり、大分県立歴史博物館から村上博秋氏(6月15日)、大分県立先哲史料館から櫻井成昭氏(6月22日)の来訪があった。

福沢研究センター諸記録 (2017年4月～2017年9月)

■ 諸会議

- *平成29年度執行委員会 (4月12日、5月18日、9月21日)
- *平成29年度第1回福沢研究センター会議 (6月7日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第3巻編集委員会 (7月5日)
- *平成29年度第1回運営委員会 (7月6日)
- *小泉基金運営委員会 (7月25日)
- *『近代日本研究』第34巻編集委員会 (8月22日、9月26日)

■ 人事

- 〈客員所員〉 新任 ボールハチェット、ヘレン (名誉教授)
4月1日～
7月21日～
〈研究嘱託〉 新任 重田麻紀
〈事務局〉 新任 今井紅美 (派遣職員) 4月3日～5月20日
新任 鍛代陽子 (派遣職員) 6月19日～7月20日

■ 主な来住

以下、戦争プロジェクトに関連する聞き取り調査には (聞) を付す。

- *塾員秋元圭子氏、尊父河西三省氏関係資料を寄贈 (4月11日、9月25日)
- *藤沢市役所郷土歴史課文化財担当徳重敬子氏、加藤信夫氏来訪 (4月17日)
- *塾員神代忠男氏、学徒出陣関係資料ほかを寄贈 (4月20日)
- *青山学院大学教授小林和幸氏来訪 (4月27日)
- *田崎久子氏、戦没塾生篠崎俊二氏関係資料を寄贈 (4月29日)
- *塾員河原一慶氏、塾員三邊謙氏関係資料を寄贈 (5月6日)
- *塾員中谷真清氏、祖父中谷慶治郎氏関係資料を寄贈 (5月14日)
- *塾員石渡春彦氏、尊父石渡道春氏関係資料を寄贈 (5月22日)
- *塾員柴田清次氏、仲地唯兼氏旧蔵資料を寄贈 (5月25日)
- *白井厚名誉教授来訪 (聞) (5月30日、6月20日)
- *中津市長奥塚正典氏来訪 (6月5日)
- *近藤武彦氏、福沢関係資料を寄贈 (6月12日)
- *杉山麗子氏、塾員杉山茂氏旧蔵品を寄贈 (6月13日)
- *塾員宮原万里子氏、遣米使節関連の図書を寄贈 (6月20日)
- *毎日新聞記者福島祥氏取材対応 (6月27日、7月28日、8月22日)
- *Nabin Kumar Panda 氏、資料閲覧のため来訪 (7月4日)
- *NHK ラジオ深夜便取材対応 (7月5日)
- *塾員吉田治彦氏、中上川婉ゆかりの火鉢を寄贈 (7月10日)
- *鎌倉三田会岡林馨氏、松岡洋太郎氏、福井章氏旧蔵資料を寄贈 (7月10日)
- *塾員河西宏和氏、河西家関係資料を寄贈 (7月10日)
- *韓国国史研究所蔡貫植氏来訪 (7月14日)
- *塾員對馬好一氏、昭和40年代学生出版物を寄贈 (8月1日)
- *染屋雅俊氏、体育会、海軍資料を寄贈 (8月3日、9月19日)
- *駐日リトアニア大使メイルーナス氏ほか来訪 (8月18日)
- *高橋めぐむ氏、祖母故高橋よし子氏旧蔵品を寄贈 (8月18日)
- *田中充氏、尊父田中多氏旧蔵品を寄贈 (8月22日)
- *添野博氏、小泉信三・とみ、和木清三郎書簡を寄贈 (9月5日)

■ 出張・見学

- *都倉、メディア・コム研修会のため葉山 (4月21～22日)
- * (文) 井奥所長、福沢旧邸保存会理事会のため中津 (4月27日)
- *都倉、麻生美幸氏訪問のため日吉 (聞) (5月9日)
- *酒井、竹屋、澁沢倉庫見学のため新子安 (5月10日)
- *西沢、福沢旧邸保存会評議委員会のため中津 (5月12日)
- *都倉、総務部学籍簿調査のため矢上 (5月15日)
- *西沢、啓明大学、梨花女子大学訪問のため韓国 (5月22～25日)
- *都倉、牟田照雄氏訪問のため調布 (聞) (5月26日)
- *都倉、資料調査のため北鎌倉・東慶寺、円覚寺 (6月6日)
- *都倉、医史学会出席のため京都 (6月10～11日)
- *西沢、進藤咲子先生を偲ぶ会に出席 (6月11日)
- *西沢、資料閲覧のため岩崎家を訪問 (6月20日)
- *西沢ほか渋沢資料館 (王子) を訪問 (6月21日)
- *西沢、韓国梨花女子大学生ほか国立公文書館を訪問 (6月27日)
- *都倉、鈴木邦夫氏ほかの聞き取り調査のため静岡県浜松市

(7月7～8日)

- *西沢、古文書講座ほか打合せのため中津 (7月12～13日)
- *都倉、ゼミ学生と目黒・亀山保氏、亀山修氏、宮川博行氏を訪問 (聞) (7月18日)
- *西沢、竹屋、寄贈資料確認のため小平の個人宅を訪問 (7月24日)、竹屋、資料引取り (8月4日)
- *都倉、資料調査のため松平俊江氏宅を訪問 (7月28日)
- *西沢ほか資料確認のため奈良家を訪問 (8月2日)、資料引取り (8月8日)
- *都倉、ゼミ学生と三鷹・宮川博行氏を訪問 (聞) (8月23日)
- *都倉、日本山岳会を訪問 (8月28日)
- *西沢、学会ほかでリスボン、ロンドン出張 (8月28～9月8日)
- *都倉、秩父宮記念スポーツ博物館を訪問 (8月30日)
- *都倉、「疎開学園の碑」除幕式出席のため修善寺 (9月7日)
- *都倉、上原家調査のため安曇野 (9月8～10日)
- *都倉、早稲田大学史資料センターを訪問 (9月13日)
- *都倉、野球殿堂博物館を訪問 (9月22日)

■ 講師派遣

- *都倉、メディア・コミュニケーション研究所オリエンテーションで講義：「歴史と表象を巡って」(4月1日)
- *西沢、信濃町地区専任職員 (新任者) オリエンテーションで講義：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月3日)
- *都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンテーションで講義：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月3日)
- *都倉、日吉地下壕保存の会主催講演会で講演：「大学は戦争の何を「引き継ぐ」のか」(4月8日)
- *都倉、SDM 合宿で講義：「表象としての福沢諭吉・慶應義塾」(4月9日)
- *西沢、中等部新入生特別講義で授業：「一身独立と自主自由」(4月11日)
- *都倉、船橋三田会で講演：「『福翁自伝』をどう読むか」(4月16日)
- *西沢、すみだ女性センター男女共同参画講演会で講演：「男女共同参画の推進」(4月26日)
- *都倉、福沢諭吉記念文明塾で講義：「『福翁自伝』に秘められた多事争論」(4月27日)
- *西沢、すみだ女性センターすずかけ大学で講演：「人間の権利と人間交際—福沢諭吉から考える—」(5月10日)
- *西沢、韓国啓明大学校で講義：「男女共同参画社会の推進と福沢諭吉の女性論」(5月23日)
- *都倉、「ヒロシマ・2017連続講座」戦争をどう伝えるか？で講義：「慶應義塾における継承の取り組み」(6月3日)
- *都倉、通信文学会で講演：「慶應義塾の学風形成にみる福沢諭吉の思想」(6月17日)
- *都倉、SFC 中等部道徳授業で講義：「慶應らしさと福沢諭吉」(6月22日)
- *都倉、SFC 慶應義塾入門で講義：「戦時の塾生と慶應義塾」(7月21日)
- *都倉、東洋大学井上円了研究センターで講演：「哲学を活かす」(7月22日)
- *西沢、リスボンで開催の European Association for Japanese Studies で発表：「福沢諭吉の女性論における明治期女性のネットワークと社会構想」(8月31日)

■ その他

- *設置講座ガイダンス：三田 (4月5日)
- *都倉、DMC 戦略的研究基盤形成支援事業ミーティング (5月2日、6月15日)
- *都倉、塾生新聞の取材対応 (5月12日)
- *都倉、所長代理で学術資料展示施設検討委員会 (7月11日)
- *都倉、酒井、美術品管理運用委員会 (7月11日)
- *西沢、都倉、酒井、学術資料展示施設検討委員会ワーキンググループ (8月25日、9月26日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第27号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2017年10月31日 (年2回刊)

編集
発行 慶應義塾福沢研究センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印刷 (有) 梅沢印刷所